

ポープとカント

馬場喜敬

(昭和59年10月15日受理)

Pope and Kant

Yoshiyuki BABA

(Received October 15, 1984)

序 言

この題で私は以前一度口頭発表をしている(日本カント協会, 第4回学会, 於学習院大学——1979年11月22日)が, それはまだペーパーになっていない。ペーパーにするにはいまひとつ未成熟であった。それは「カントの自然史をめぐって」というサブタイトルが付されており, 主としてカントの著作“*Allgemeine Naturgeschichte u. Theorie des Himmels*”(天界の一般自然史と理論) 1755におけるポープとカントの関係を明らかにしようとするものであった。またそれを通じて, カントがここでいう *Naturgeschichte* の性格に思想的光をあてることでもあった。

既稿“*Physiographie u. Physiogonie bei Kant*”^①において私は, カントが80年代に *Naturgeschichte* と *Naturbeschreibung* を区別して, 従来, *Naturgeschichte* とされていたものに, この二つが混同されており, 混同からくる混乱を避けるためには, *Physiographie* を後者に, 前者すなわち *Naturgeschichte* には *Physiogonie* をあてて, 夫々の概念内容をはっきりさせたい希望をのべていることにふれた。カントは自分でこれを実際は当論文以降, ほとんど, いや全く活用して講じていない。但しこの80年代の *Naturgeschichte* が, カントに, 新たな意識でとり上げられたとするならば, 50年代の, この *Naturgeschichte* は, ここで *Ur-naturgeschichte* ととらえ直しておくことが便法ともなろう。これも既稿の中で多少ふれた。

カントが *Physiographie* と *Physiogonie* の区別を立てたのは1788年「哲学における目的論的原理の使用について」の脚注においてである。この時期はすでに批判期であり, 三批判書の完了する10年間(1781~1790)の半ばをすぎている。三批判書全体の構想の成立の経緯, 「純粹理性批判」の1版, 2版(1781, 1787)の問題, その間における「プロレゴメナ」(1783)の位置, 「実践理性批判」(1788)との関係, 「判断力批判」(1790)の二つの序文の評価^②, 批判哲学の全体構想はいつ明瞭化されたか, その時期が三批判書全体のバランスにどう影響しているか——そして本稿との関係でいえば, カントの自然史・歴史哲学は, 批判哲学の成熟とどのような関係があるか。これらは相関連しながら, ひとつひとつが興味あふれるテーマである。

ところで, ここでは先ず以て1755年^③にかえることにする。*Himmelsgeschichte* においてポープがカントにいかにか影響しているか, その影響の根底は何であったか。さらに, 影響はこの年代にとどまらなかったのではないか。この最後の予測(仮設)は従来のカント解釈にいくらかの, 或いは重要な変更をもたらす要因をはらんでいる。先述の, ペーパーにならなかった理由にも関係している。

1

カントの *Allgemeine Naturgeschichte u. Theorie des Himmels* とはいかなる著作であるか。

Aetas Kantiana (カントの時代)の評語が生れた1800年頃のカントとは, 批判哲学者カントであって, その当時及びそれ以降, 一般に前批判期の著作

に対する関心は薄い。ヘーゲルの哲学史はこれに一行もふれていない。カール・フォーレンダーの「カントの生涯」は、ポープがカントのお気に入りの詩人であったことを随所（5カ所）に記しているが、立ち入っては論じていない。近時ではヤスパースが簡単に次のように記している^④。

「前批判期の著作の第一のグループは、自然科学的性格をもっている。その中には有名な“天界の一般自然史と理論”がある。カントは、恒星の巨大な集団としての銀河が、そのうちのひとつを人間が、肉眼でアンドロメダにおいて見るような、遠い楕円形の星雲に相当するものとの推測をなした最初の人である。その他の著作は地球の回転、地質、火、風に関してのものである。自然科学は批判哲学の基礎として後々まで変らない」

ここではこの著作の意義付けはみられるが、その社会的思想史的背景についての展望は余りみられない。そして批判哲学の基礎としての自然科学的著作という観点は、新カント派以来の観念論的伝統の通念を継承している。この記述からは「科学の純粋性をはなれては哲学の明晰性はえられない」という、すでに出来上っていたヤスパース哲学の構図のカントへの投影が顕著である。

上記と異なる思想汐流からのこの著作の評価もあった。いち早く同時代人にしてかつてカントに学んだヘルダー（1744～1803）が力強くこの著作の独自の意義をうたい上げた——のちにそのヘルダーとカントとが歴史哲学上の論争をするに至るのは思想史的イロニイである！——、やがてエンゲルス（1820～1895）が「自然の弁証法」として公刊された遺稿の中で、カントのこの著作を、“硬直した自然観の最初の突破口をひらいたもの”とし、宇宙生成論の進展への跳躍台となった、と評したことは既稿でも言及した。なお“コスモス”（5巻）の著者 A. v. フンボルト（1769～1859）がこれを賞揚していることも一言加えておこう。

カッシーラーはもう一步広い視点に進む。Cassierer 版 Kants Werke の Herausgeber であるかれ自らが全集に加えた一巻 Kants Leben u. Lehre, 1918ではこの著作のかげは薄い、1932. Philosophie der Aufklärung で、カッシーラーは、“天界自然史”に後期の著作によっても凌駕さ

れないもののあることに注意を向ける。かれはまたこの中でポープを引用し、ニュートンの意義をのべる。“ニュートンは自然認識にはじめて、恣意的・空想的な仮定から概念の明晰性への、闇から光への道を指し示した”。

Nature and Nature's laws day hid in night.
God said: "Let Newton be", and all was light.

自然と自然の法則とは夜の闇にかくされていた神はいった“ニュートン在れ！”そしてすべてが光をえた。

これはポープの詩（ニュートンの墓碑銘）である。ポープの言葉“人間の固有の研究（の対象）は人間である”（the proper study of mankind is man.）は“この時代の根本感情に対し、簡潔にして含蓄ある表現を与えているもの”であるが、その当のポープの詩はこの時代にあってもっとも尊敬を享受したのがニュートンであることを示している、こう、カッシーラーは語る。

カッシーラーによってカント、ポープ、ニュートンの3人の名がいわば三幅対的に出てきたところで、問題の著作にもどることは当をえているであろう。この著作の副題は、周知のように、“Versuch von der Verfassung und dem mechanischen Ursprunge des gangen Weltgebaudes nach Newtonischen Grundsätzen abgehandelt”（ニュートンの諸原則に従って論じられた全宇宙構造の体制と力学的起源についての試論）というものであって、ニュートンあつてのこの著作である。ニュートンの原則とはいうまでもなく引力の法則である。“実際私は最大の慎重さをもって、あらゆる恣意的な虚構を排除した。私は宇宙を最も単純な渾沌状態へ還元してから、引力と斥力以外のいかなる力をも、自然の偉大な秩序の展開のために用いることをしなかった。この二つの力は、等しく確実であり、等しく単純であり、また同時に等しく根源的かつ普遍的である。両者はニュートン哲学から借りてこられたものである。前者は今日では疑いもなく決定的な自然法則である”。そしてこれに依拠することによってカントは、“われに物質を与えよ。私はそれから宇宙を建造しよう（私は宇宙がいかにしてそれから生ずるかを諸君に示そう）”といいたのである。

全体は三部に分かれる。

第一部：恒星間の体系的体制の概要。そのような恒星系が多数あることについて。

第二部：自然界の最初の状態、諸天体の形成、それらの運動の諸原因、および特に惑星系における、また全創造に関する諸天体の体系的関係の諸原因について。

第三部：自然の諸類比に基づいて種々なる惑星の居住者を比較する試論。

さてここに至って判明することは、I部・II部とIII部との間にある Lücke である。カントはこれを意識していなかったであろう。意識せずしてなされていることがほかならぬこの著作の特徴といってもよい。そしてここで先にカッシーラーがとり上げた3幅対の一人の詩の引用が目をはひくのである。すなわちポーブ。それはIII部に限らず、I部・II部の扉の頁を飾っている。さらにII部の本文の一つ、III部の扉と本文に二つ、計六カ所にあらわれる。

ポーブの人間論 An Essay on Man 1733——カントの引用の源泉——はボーリングブローク卿宛書簡の形式で書かれた韻文の人間論である。4篇から成る。

- I 人間の性質・状態と宇宙との関係
- II 人間の性質・状態と個人としての人間との関係
- III 人間の性質・状態と社会との関係
- IV 人間の性質・状態と幸福との関係

これは“人間についての一般的見取図” a general Map of Man であり、一切の倫理学の問題が包含される、とポーブはいう。

“見るがよい、この空、この海、この大地を埋めて／あらゆるものが生々躍動し、誕生している／上には生命がなんと高くまで進出し／周囲はなんと広く、下はなんと深く延びていることか／存在の巨大な連鎖！

それは神に始まり／天のもの、地のもの、天使、人間／けだもの、鳥、魚、虫／眼に見えぬもの、望遠鏡のとどかぬもの／無限から汝へ、汝から無へ。——”

“汝自身を知れ、神の謎を解こうと思ひ上るな。人間の正しい研究対象は人間である。”

“他人にも善を分つ欲望は高貴な目的をみざすもので欲望一般の価値を高め、美德の名を帯びる。”

“すべてあるものは正しいのだ (Whatever is, is right.)”

“美德のみが地上の幸福である。”

以上ニュートンの原則（機械論的宇宙論）の原則に立ちながら、ポーブの人間論を接合するというカントの構想をとり出してみた。これをわれわれの立場で手短かに要約すると、次のようになる。（Anhang 1 参照）

スコットランド学派で始まった natural history の名でよばれる一連の研究は、D. Hume の n. h. of Religion であり、A. Smith の of Language であり、John Miller の of Rank であって、natural history とはいえ、対象はひろく human nature の natural history であり、moral philosophy に属する。Kant の Naturgeschichte (natural history) は Kant の先述の後期の術語でいえば physiogonie を包含するものであろうけれども、この段階においては、むしろ natural history と moral philosophy の結合という形であらわれている。すなわち私が Ur-naturgeschichte なる語を考えた所以である^⑥。

2

カントをポーブに結び付けたものは何であったか。「それは Great Chain of Being としての宇宙という観念である」とは、A. O. ラブジョイの力説するところである。History of Ideas の古典的文献に数えられる同名の書（1936）の第6章の冒頭で、かれは大意次のように語る。

“存在の連鎖としての宇宙とその概念の基礎となる諸原理——充滿、連続、段階 (plenitude, continuity, gradation) ——が最も広く受け入れられたのは18世紀であった。これは一見奇妙である。その発生をプラトンとアリストテレス、そしてその体系化を新プラトン主義者に負う観念の集合が、こんなにも遅まきの結実をみたのだから。とくに18世紀の初め¼世紀は、知的流行としては、これらの仮定に敵意をもつ者が多かった筈だから。アリストテレスの権威は失われて久しく、スコラ哲学とその方法とは<啓蒙>を自負する人々の間では軽侮と嘲りの対象であった。一方ベーコン的気質、忍耐強い経験的な探求は科学において勝ちほった行進をつづけ、教育ある大多数の熱狂の対象であった。存在の連鎖の概念とそれを支える仮定は、経験より引き出される一般論でないことは明らかであり、実際自然の既知の事実と調和しがたかったのだ。それにもかかわらず、なのである。科学者、哲学者、詩人、通俗的随筆家、理神論者、正統的聖職者など、

あらゆる種類の著述家が、存在の連鎖について語り、それと関係がある観念より成る一般的枠組を暗黙のうちに入れ、それらの観念から、潜在的な或いは明らかな意味を大胆に引き出している。Addison, King, Bolingbroke, Pope, Haller, Thomson, Aken-side, Buffon, Bonnet, Goldsmith, Diderot, Kant, Lambert, Herder, Schiller,……”

このようにカントとポーブと、ラブジョイによって、ともに上記18世紀の一大汐流のなかにとりこまれるが、2人の関係でいえば、年代順からも当然であるが、ポーブの思想がカントにうけつがれたのである、(Anhang, 2, 3参照。—カントの引用は Brockes による独訳であって、ポーブの原文ではない。Anhang 2, 3はその対照を示した)。

6つの引用の詩句を集約し、一応それを両者の共通項とみて、叙述を試みよう。

人間は大いなる存在の連鎖の中間、——すなわち見える世界 visible world と見えざる世界 invisible world の接点に位置している。人間の上にはより上位なる存在者、天使、天使長が、下にはけだもの、鳥、魚、虫が、かのエーテル界と並ぶ存在圏——空、海、大地——を埋めつくしている。

存在の連鎖の頂点に位する神は「一切のものの神として、英雄が死に、一羽の雀が落ちる」のを、また「原子や組織が崩壊し、水滴が破れ、世界が裂けるのを、すべて一様の眼で眺める！——植物が死んで生命を支え、生命が解体して再び成育する。すべて死に行くものは他のものを補充する。充満、連続、段階(階層性)の中、この永遠のサークルを維持する摂理 Providence がある。

中間者としての人間の理性のつとめは、その摂理を知ることである。そこに徳があり、この徳こそが地上の幸福である。

中間項の分にとどまるとき、ポーブの眼には、かの頌詩を献呈してたたえたニュートンも、次のような姿になる。

“天使は死すべき人間が、自然の法則のすべてを明らかにするのを最近見たときに、地球上の者のそのような英知に驚いて我々が猿でも眺めるようにニュートンを指さした。”そしてこの詩を引用しているカントについて、ラブジョイは、カントが次の如く同様の観念を陽気な気分で繰り

返した、と述べる。

“人間はいわば存在の梯子の中段を占め、……両端から同程度離れている。天王星や土星に住む最も崇高な種類の理性的存在を考えることが、人間の羨望を日ざましたり、劣等感により卑屈にさせたりしても、金星や水星に住む、人間性の完全さにはるかに及ばない低い等級のものに視線を向けることによって、再び満足を得るであろう。”

かくの如く、とラブジョイはいい、カントはポーブの人間論の第一書簡の「哲学」を散文で拡大延長したものととっても誇大ではあるまい、というところまで進む。そこでカントの Himmelsgeschichte に Physiognie 的萌芽が含まれるとしても、それは「充満の原理を時間化したにすぎない」、大いなる存在の連鎖という空間的秩序を時間の序列におきかえたにすぎない、ということになる。

ラブジョイによって明快な説明を与えられた Great Chain of Being と Kant の思想との関係は、——一応それを肯定するとして——Himmelsgeschichte にとどまらず、のちのちまでつづくものであろうか。

批判哲学を支える諸概念の批判的検討にも Great Chain of Being は必須の前提条件であらうか。

また最近では Great Chain of Being は現象学 Phänomenologie との関連においてもとり上げられている。——フッサール論集(現象学的研究年次報告)第11巻 Analecta Husserliana (The Yearbook of Phenomenological Research.) Vol. XI 1981 はこの問題特集している(The Great Chain of Being and Italian Phenomenology)。そのうちの一つをとり上げて本稿の中間的結びとする。

ウエルクマイスター(W. H. Werkmeister)は“Kant, Nicolai Hartmann and the Great Chain of Being”という論文で、ほぼ上述と同じ見地に立っているが、いま指摘した点に関し、カントの遺稿の一つに注目する。それは60年代のものである。

1762年、ルソー Rousseau の「社会契約論」が出版され、さらに1年後には「エミール」が独訳でも出版された。カントは両書を読み、深い、永続的な感銘をうけるのであるが、その頃カントは以下の如く書きとめる。

“ニュートンは、彼以前には、無秩序と乱雑な多様性しか見出しえなかったところに、秩序と規則性が、

偉大な単純さと結びついているのを、はじめて見出した。……ルソーは、人間のさまざまなかりの姿の中に深くかくされた人間の本性をはじめて発見した。この法則に従い、これを守るにより、摂理は義とされる。……ニュートンとルソーにより神は義とされ、いまやポープの命題は真である。”

よくとり上げられるカントのルソー体験に関連してポープが出てくることは注目される。ウエルクマイスターはさらにあとづける。1768年5月9日の日付をもつヘルダー Herder 宛手紙がポープを称賛している。1791年においてなおヘルヴェーク Hellweg 宛の手紙もまたポープにふれている。これは「判断力批判」(1790年)より後の年である。“nature as art” の概念がそこで中心を占めるが、それは、ポープの命題、すべての自然はあなた方に知られざる芸術である (all nature is but art, unknown to thee.) をおもわせる。さらに近時刊行の遺稿の中に一つ、ウエルクマイスターは跡づける^⑦。要するに影響はここでも永続的である。

ところで Great Chain of Being と批判哲学とは本来どこかで抵触する筈である。as if 的解決が可能な aesthetics ではうまく避けられるとしても、たとえば宗教に関することにおいては衝突は避けられないのではあるまいか。そもそも Great Chain of Being そのものの吟味という問題がある。この根本的な相において Kant は自らの思惟のどんな途をとろうとしたか。カントは語ることを抑制しているかのようである。(未完)

Anhang 1

“natural history” in der Schottischen Schule
 D Hume : Natural History of Religion, 1757
 A. Smith : Consideration concerning the first
 Formation of Language, 1759
 J. Millar : Origin of Distinction of Rank, 1771
 (generally : Natural History of Human Nature)
 → *moral philosophy*

“l’histoire naturelle” bei Buffon
 history of animals, vegetables and minerals
 history of ‘Sein’ natural history
 history of ‘Werden’ → *natural philosophy*

“Naturgeschichte” bei Kant

Naturgeschichte des Himmels
 → Urnaturgeschichte

Naturbeschreibung (Physiographie)
 Eigentliche Naturgeschichte (Physiognomie)
 (=Naturgeschichte als Geschichtsphilosophie)

Urnaturgeschichte
 Himmelsgeschichte (natural history)
 Essay of Man (moral philosophy)

Anhang 2

- Pope,
 in Kants “Allgemeine Naturgeschichte und
 Theorie des Himmels” (1755)
1. Look round our World ; behold the chain of
 Love
 Combining all below and all above.
 —A. Pope : An Essay on Man,
 Epistle III—1 (7~8)
 2. See plastic Nature working to this end,
 The single atoms each to other tend,
 Attract, attracted to, the next in place
 Form’d and impell’d its neighbour to embrace.
 See Matter next, with various life endu’d,
 Press to one centre still, the gen’ral Good.
 —III—1 (9~14)
 3. Oh blindness to the future! kindly giv’n,
 That each may fill the circle merk’d by Heav’n;
 Who sees with equal eye, as God of all,
 A hero perish, or a sparrow fall,
 Atoms or systems into ruin hurl’d,
 And now a bubble burst, and now a world.
 — I — 3 (85~90)
 4. He, who thro’ vast immensity can pierce,
 See worlds on worlds compose one universe,
 Observe how system into system runs,
 What other planets circle other suns,
 What vary’d being peoples ev’ry star,
 May tell why Heav’n has made us as we are.
 — I — 1 (23~28)
 5. Superior beings, when of late they saw

A mortal Man unfold all Nature's law,
Admir'd such wisdom in an earthly shape,
And shew'd a NEWTON as we shew an Ape.

— II — 1 (31~34)

6. See, thro' this air, this ocean, and this earth,
All matter quick, and bursting into birth.
Above, how high, progressive life may go!
Around, how wide! how deep extend below!
Vast chain of Being, which from God began,
Natures aethereal, human, angel, man,
Beast, bird, fish, insect! what no eye can see,
No glass can reach! from Infinite to thee,
From thee to Nothing! — I — 8 (233~241)

Anhang 3

Pope auf deutsche (Übersetzt von Brocke)

1. Seht jene große Wunderkette, die alle
Teile dieser Welt
Vereinert und zusammenzieht und die das große
Ganz'erhält.
2. Schau sich die bildende Natur zu ihrem
großen Zweck bewegen,
Ein jedes Sonnen-stäubchen sich zu einem
ändern Stäubchen regen,
Ein jedes, das gezogen wird, das andere
wieder an sich ziehn,
Das nächste wieder zu umfassen, es zu for-
mieren sich bemüht.
Beschau die
Materie auf tausend Art und Weise sich
Zum allgemeinen Centrodrängen.
3. Der stets mit einem gleichen Auge, weil er der
Schöpfer ja von allen,
Sieht einen Helden untergehn, und einen
kleinen Sperling fallen,
Sieht eine Wasserblase springen, und eine
ganze Welt vergehn.
4. Wer das Verhältnis aller Welten von einem
Teil zum andern weiß,
Wer aller Sonnen Menge kennt, und jeglich-
en Planetenkreis:
Wer die verschiedener Bewohner von einem

jeden Stern erkennt,

Dem ist allein, warum die Dinge so sein,
als wie sie sein, vergönnet,
Zu fassen, und uns zu erklären.

5. Da jüngst die obern Weisen sahn,
Was unlängst recht verwunderlich
Ein Sterblicher bei uns getan,
Und wie er der Natur Gesetz entfaltet:
wunderten sie sich,
Daß durch ein irdisches Geschöpf dergleichen
möglich zu geschehn,
Und sahen usern Newton an, so wie wir einen
Affen sehn.
6. Welch eine Kette, die von Gott den Anfang
nimmt was vor Naturen
Von himmlischen und irdischen, von Engeln,
Menschen bis zum Vieh,
Vom Seraphim bis zum Gewürm.
O Weite, die das Auge nie Erreichen und
betrachten kann! Von dem Unendlichen zu
dir, von dir zum Nichts!

Ammerkuugen

- ① Y. BABA : Physiographie und Physiogonie
bei Kant - Naturgeschichte als Ceschich-
tophilosophie 東京家政大学紀要 第18集 (1978)
- ② z.B. Helga Mertens : Kommentar zur Ersten
Einleitung in Kant's Kritik der Urteils-
kraft (1973)
- ③ 1755年——Kants Himmelsgeschichte 刊行以外
にもこの年は特記すべき年であった。リスボンの大
地震であり、楽観論争(「ものみなよし」をめぐる
論争)である。
その年も暮れに近づいた11月1日万霊節の午前9
時40分、リスボンは烈しい地震に襲われた。"大き
な商業都市、港湾都市である壮麗な都市がなんの予
告もなくもっとも恐るべき不幸に見舞われたのだ。
大地はふるえ、ゆらぎ、海は沸き立ち、船は砕かれ
た。家々は崩れ、さらにその上に教会や塔が倒れお
ちた。宮殿の一部は海に吞まれ、裂けた大地は炎を
吐くかともみえた。廃墟のいたるところに煙がたち上
り、火炎が上っていた。ついでしたがたまで平和に

安らかに暮していた6万の人間が一瞬のうちに死んだ。”——ゲーテ「詩と真実」第一部第一章

たったいま、「天界自然史」は、北方の Konigsberg から、「自然の創造の持続性・一貫性・豊かさ、その法則性、秩序の素晴らしさ」に対し、讃辞を呈しおえたばかりであった。この本を読むものは「晴れた夜、星のちりばめた天空の眺めは、高貴な魂のみが感じる一種の悦びを与える」というカント（但し本は匿名公刊であったが）に促されて、眼を天上に注ぐ心が養われていたにちがいない。

ところが地上ではおそろるべきことが起きたのである。ボルテールは書いた。

“おお、あわれな人間、悲しみの大地よ／おお、すべての人類のおそろるべき集まりよ／無益に苦しむ永遠の群集よ／愚かしくも「ものみなよし」と叫ぶ賢者よ／来りてこのおそろしい廃墟を見よ／この破壊と残骸とお前の種族の死灰を／山と積まれたみな殺しの女や子ども／折れた支柱の下に散らばる切れ切れの四肢／滅ぼし尽くされた大地に無数の人がいまも／血を流して引き裂かれ、かすかに息づいて／おのが屋根の下に埋もれ、助けるものもないまま／恥ずべき苦痛のうちに痛ましい生命を終わろうとしている／その絶え絶えの声にはならない叫びに向って／残忍な光景の中で煙を吹く燃えがらに向って／お前は「これもすべて永遠の法則／自由と善なる神の選択に縛られたものだ」と言うのか／お前はこの大勢の犠牲者をまえにして言うのか／「神は復讐された。彼らの死がその罪を償っているのだ”

——「リスボンの災害について、または「ものみなよし」(“Tout est bien”) という金言の検討」ボルテールはこの詩をパリで書いた。パリはこの詩によって混乱に陥った。オプチミズム(楽観主義)の甘い夢を破られた者たち、また「いわゆる哲学者たち」も同じだった。辛うじてルソーがボルテールに手紙を書いた。「人々が村での素朴な生活を愛し、質素な家庭を営んでいれば、犠牲者はもっと少なくてすんだのではなからうか。」と、そしてもう一度、この世はよし、をうたい上げた。

“われわれは神が善であると信じなければならぬ。自滅的な悲観論に対しては、それ以外に取る道がないのである。神がこの世をつくり給うたのである限り、この世にあるすべては究極的には、そして

長い目でみれば、正しさに違いないということ、ライブニッツとともに信じ続けなければならない。”

ポーブとともに「ものみなよし」(“Tout est bien”)「あるものは正しい」(whatever is, is good) といったばかりの北方の匿名のカントはまだ表立った発言の責務からは免れている。年が明けてからカントは筆をとった。ケーニヒスベルク週報4号(1756. 1.14), 5号(1.21)の「地震論」がそれである(詳しくは「昨年末ヨーロッパの西部諸国を襲った天災に際して地震の原因を論ず」)。

“全人類の運命にかかわる重大な出来事が機縁となって喜ばしい好奇心が呼びおこされるのは至当なことである。けだし、この好奇心は何によらず異常な事柄に際して目ざめその原因をつきとめようとするものなのである。” こういう書き出しで始まるこの小論はおよそパリの調子とは異なっている。カントは自然科学者として筆をとっている。冷静に、興奮することなく、現象を客観的にとらえてその原因を究明しようとしている。引きつづき書かれた「地震の歴史と記述」、次の「地震論再論」でも当然同じ態度が貫かれる……。

ともあれ、リスボン、パリ、フランクフルト、ケーニヒスベルクと全欧の人々の心を震撼した1755年は1492年や1776年、1789年などの如く、特異な年とみなすべきようである。今日、そこに「聖なる天蓋」the sacred canopyの崩れゆくさまを見てとる者(P. L. Berger)もいる。

- ④ K. Jaspers: I. Kant (in “Großen Philosophen,” I, S. 403), 1956
- ⑤ Himmelsgeschichte 執筆の動機に、1750年 London で公刊された Thomas Wright: An original theory and new hypothesis of the Universe があげられる。カントはそれを Hamburgische Fragen Urtheilen u. Nachrichten zum Aufnehmen der Wissenschaften u. Historie überhaupt (1751) 誌上のかかなり詳しい評論によって知った(Akademie Ausgabe: Kant-Werke-Anmerkungen [1-V]S. 546/7)。しかしこのことはポーブとの関係の深さを打ち消すものではない。——なおこれに関連し、20世紀の宇宙論のフロントはどんなものか。カントにも、そしてトーマス・ライトにもふれて述べているカール・セーガンの本の

一部を引用しておく (Carl Segan: Cosmos 訳書「コスモス」(1980) 下巻, p. 61, 62).—

「18世紀に生きたダーバンのトーマス・ライトとケーニヒスベルクのイマヌエル・カントとは、天体望遠鏡で見たとき、明るく美しくうず状に見えるものは、ほかの銀河だろうと予測していた。しかし20世紀になってからも、かなり長い間天文学者たちは、宇宙には銀河は一つしかないと信じていた。天の川、つまり私たちの銀河系以外には、銀河はない、というわけだ。カントは「アンドロメダ座のなかにあるM31という星雲はもう一つの天の川である。それはものすごい数の星でできている」とはっきり述べ、このような星を「島宇宙」という衝撃的な忘れられない名前と呼ぶことを提案した。……宇宙のはてにいたるまで、宇宙の暗い空間にはそのような銀河が1,000億個も輝いている。……(なおM31とはフランスのシャルル・メシエが作った星雲などの表の31番目にあげられているのに基づく。アンドロメダ座にあるのでアンドロメダ銀河ともよばれる。)

- ⑥ 現象学。現象学と Great Chain of Being とのかかわりはこのウェルクマイスター論文ではとくにはっきりと主題化されて論じられていない。またわれわれがそれをするためには、今日多様に展開されている現象学の夫々についての理解なしにはすまされないであろう。詳論は他稿にゆずる。

- ⑦ 以下は W. H. Werkmeister が引用したカント遺稿の英訳そのままを掲げた。

Nature organizes matter in manifold ways not only as to species but also according to levels. We need not consider the fact that in strata of the earth and rocky mountain ranges specimens of animal and plant species, now extinct, are evidence of former and now foreign products of our life-giving globe, but that the organizing force of them has also organized the whole of the plant and animal species, which are created for one another in such a way that they, man not excluded, form a circle as *links of a chain* not only as far as their nominal character (of similarity) is concerned but also as far as through their real character (as causality) they are in need of one another for their existence, which points to a world organization (for unknown purposes) including even the system of stars.